

京都大学	博士（文学）	氏名	兒玉 麻美
論文題目	レッシング以降のファウスト文学		
<p data-bbox="183 398 438 432">（論文内容の要旨）</p> <p data-bbox="162 439 1428 902">16世紀以降、ファウスト博士の知的好奇心と魔術の試み、その冒険とおぞましい地獄墮ちについての物語は、ヨーロッパ中に伝播し、広く受容されてきた。ヨーハン・シュピーズによって出版された最初の民衆本『実伝ヨーハン・ファウスト博士』（1587）では、神の領域を侵犯しようとする人間の傲慢は、地獄墮ちの結末によってきびしく戒められた。だが18世紀中盤、啓蒙主義最盛期のドイツにおいて、ファウスト文学は本質的な変化を迎える。ファウストの認識衝動は、劇作家レッシングによって肯定的に捉えられ、ここで文学史上初めて、救済の概念が提起される。本論文は、レッシングの戯曲断片『ファウスト博士』（1759）の成立背景、テキスト本文の解釈、また後代のパウル・ヴァイトマン、フリードリヒ・ミュラー、レンツ、クリンガー、レーナウ、グラッベの作品との影響関係などを検討しながら、従来はゲーテの『ファウスト』（1808/1832）を中心にして論じられてきたファウスト文学のアクチュアリティを、別の視点から捉えなおそうと試みるものである。</p> <p data-bbox="162 909 1428 1765">第一章では、レッシングの戯曲断片『ファウスト博士』を取り上げる。レッシングの『最新の文学に関する書簡』第17号（1759）における、フランス古典劇とゴットシェート詩学の影響圏から脱し、新たなドイツ国民文学を創出すべきであるという訴えは、広く注目を集めた。独創的な天才による努力と挫折を、偉大な英雄悲劇として描き出すにあたって、レッシングはファウスト伝説を理想的題材として提示した。この素材は、18世紀中盤においてはすでに低俗なものに成り下がっていたが、レッシングの再解釈によって新たな価値を与えられ、1770年代以降の文学運動のなかで重要な課題として受け止められていく。その一方で、70年代の半ばまで取り組みが続けられたにもかかわらず、レッシングのファウスト劇が完成に至らなかったという事実は、救済構想の実現困難性を示している。その背景には、悪魔や天使といった非現実的モチーフの扱いに対する懸念があったと考えられる。レッシングは、最終的にこうした要素の解体へと向かい、市民悲劇『エミーリア・ガロッチィ』（1772）では悪魔的な性質をそなえた人間を誘惑者として登場させ、また『賢者ナータン』（1779）や後期の宗教哲学的テキストのなかで哲学的真理と啓示的真理の調和を展開することで、断片『ファウスト博士』において積み残した問題を解決しようとした。他方、自らのファウスト劇は完成しなかったものの、「ドイツの各地からファウストが次々に発表されるような時代」がやがて来るだろうというレッシングの予言は実現した。しかし、彼が提示した近代的自我の救済というテーマは、当初からほとんど実現不可能な内部構造を有していた。レッシングのファウスト断片は、これまで作者自身の内的欲求とは無縁のテキストと解されてきたが、批判的論文集『救済』（1753-54）などに見られる自己救済への志向を併せて考察すれば、そうした願望ともけっして無縁ではなかったと考えられる。</p> <p data-bbox="162 1771 1428 2072">第二章では、ヴァイトマンの『寓意劇ヨーハン・ファウスト』（1775）とミュラーの『韻文劇ファウスト』（1778/1823）を取り上げる。この両作品は、ともにレッシングから刺激を受け、救済という結末を描き出したが、どちらもファウスト文学史研究においては低い評価を受けてきた。ここでは「力の無力」というテーマに着目し、レッシングの断片に見られる悪しき意図と善い結末の結びつきというテーマが、ヴァイトマンとミュラーのテキストにおいて変形され、結果として救済構想を内部から崩壊させるきっかけとなったことを考察する。ヴァイトマンは、『寓意劇ヨーハン・ファウスト』の最終場において、天使イトゥリエル降臨の情景を描き、神による恩寵の</p>			

揺るぎなさを強調したが、その一方で、世界向上のために力を尽くすファウストの善行がすべて覆され、人々に不幸をもたらしてゆくというエピソードは、傲慢への戒めと人間存在の無力を印象的な形で示している。他方ミュラーは、レッシングからのアドバイスに従って、『韻文劇ファウスト』の結末で救済を描き、理性の勝利と夢想の克服によって全八幕の劇を締めくくっている。しかし最終幕のテキストにおいて、ミュラーはその調和的解決に何度も疑義を挟み、強迫症的な確認行動を繰り返しており、切狂言を締めくくる「ファウスト博士万歳」の叫び声は、どこか不穏な予感を漂わせている。レッシングによる救済構想は、そのポジティブなイメージによって多くの人の心を捉えたにもかかわらず、実現の段階になると多くの困難を生み、楽観的で強引な結末であるとの批判を浴びることになった。自らの力を用いて他者をよりよい生へと導き、歴史的・政治的誤謬を正し、世界に救いをもたらすことが果たして可能であるのかという問いは、啓蒙主義それ自体に内在するアポリアと照応し、その根底に横たわる問題性を示している。両作においては、世界を変革しうる力を持つことが、ファウストに内的不安定をもたらす契機となっており、これ以降のファウスト文学において、ふたたび悲劇的な地獄墮ちの光景が描かれるようになる予兆がすでに読み取れる。

第三章では、レンツの戯曲断片『地獄の審判者たち』（1777）を取り上げる。レンツはこの断片において、主人公ファウストに自己自身を投影し、一方で救い主バックラスには親友ゲーテの姿を重ねて描いた。ゲーテが1776年の日記に記した「レンツの愚行」が両者の決裂の契機となったことは広く知られているが、レンツはこれ以降もゲーテとの関係修復を望み続け、次第に精神の闇へと囚われていった。『地獄の審判者たち』においてファウストの救済を決定づける、バックラスからの「お前の心は偉大だった」という呼びかけは、レンツがゲーテの口から聞いた言葉であった。その一方で、レンツは救いがけっしてもたらされないことを自覚しており、この断片を「茶番劇」として位置づけることで、作中人物への自己投影から身を切り離し、客観的な態度へと立ち返るそぶりも見せている。レンツは『家庭教師』（1774）や『軍人たち』（1776）においても、独立と自己実現への欲求が破綻してゆく過程を残酷な筆致で描き出したうえで、結末の強制的調和を「喜劇」と呼ぶことによって歪な世界像を提示しており、こうした態度はレッシング作品のパロディーあるいはカリカチュアとも解釈されている。レッシングと同様、レンツもまた、偉業を成し遂げようと邁進する天才の姿を肯定的に描き出すべく劇作に取り組んだが、そうした独行者がしばしば外界と衝突し、耐えがたい被制約性や孤独のなかで自己破壊へと向かわざるをえないことを見抜いていた。主観的自我と客観的世界の対立という主題をファウスト文学のなかでいち早く示した点において、レンツの断片は、のちのクリンガーやレーナウの作品と問題意識を共有した先駆的な試みであったといえる。

第四章では、クリンガーの小説『ファウストの生涯、行状、地獄行』（1791）を取り上げる。この作品には、レッシングの断片以上にはっきりと啓蒙主義的な主張が盛り込まれ、主人公ファウストは漠然とした真理の探究者ではなく、人類を啓蒙する装置である印刷術の発見者として登場する。しかし、ファウストの発明の価値を理解する者は現れず、啓蒙の対象となるはずの民衆たちが、ひたすら墮落した無価値な存在として描かれる点において、この作品は、啓蒙のひとつの挫折像を示している。個人に対する社会の無理解、抑圧的状况、既存の封建体制などに対する怒りと不満の荒々しい表明は、シュトゥルム・ウント・ドラング期のレンツとクリンガーの作品を特徴づける要素であるが、その一方で、腐敗した世界に対する反抗的心情の吐露は、悪しき旧弊の弾劾と不正への告発という側面において、啓蒙主義的な側面をも垣間見せる。クリンガーのファウストは、善人の仮面をつけた人々の歪んだ本性を暗闇のなかから引きずり出し、白日のもとへと晒し続けるが、次々と明らかになる世界の真の姿は、彼をただ救いのない絶望へと追いやってゆく。荒々しい感情の波、冷ややかな批

判、現状打破への憧憬、革命の挫折などが目まぐるしく行き交うなかで、ファウストの迎える結末は、自己破壊的な方向へと向かわざるをえない。この作品を特徴づけるのは、過剰な残酷描写であり、カニバリズムや虐殺を扱った悲惨なエピソードの数々は、作者自身の世界憎悪を示すものと解されてきた。しかし、こうした描写はむしろ世界の惨状を極端な形で提示し、読者の心に憤りと抵抗感を芽生えさせようとするクリンガーの意欲の反映でもあった。劇作家として出発したクリンガーが、のちに小説という執筆形式へと移行していった背景には、対話の応酬によって刻一刻と変化する情景を描くドラマの形式を脱して、より思弁的・哲学的に緊密な構造をもったテキストを提示し、読者をいっそう複雑な思考へと導こうとする啓蒙主義的な意図があった。この作品を締めくくる地獄墮ちの光景は、けっして主人公への否定的評価ではなく、むしろ救いがたいほどに墮落してしまった地上世界に対する激烈な批判となっている。こうした点で、明るい未来への確信にみちたレッシングのオプティミズムとは異なり、クリンガーの啓蒙の試みは、完全なペシミズムに裏付けられた抵抗運動であった。

第五章では、レーナウとグリルパルツァーのファウスト作品を取り上げる。救済や地獄墮ちの結末をはっきりと見据えて手がけられた他のファウスト作品とは異なり、レーナウの『韻文詩ファウスト』（1836）は、その着地点を明確に設定せずに執筆が進められた。結末は、ファウストの自殺によって締めくくられているが、これは読者にとってのみならず、作者自身にとっても意外なものだった。この結末は、救済か地獄墮ちかという二分法的解釈をすり抜ける曖昧さをもっており、研究においてもその解釈は一致をみていない。悪魔との契約や苦しみに満ちた生涯、知的探究心など、自らを構成するすべての要素が夢にすぎなかったと嘆息するファウストに対して、メフィストは、その逃避的願望をせせら笑っており、レッシングやミュラーが描いた夢による救いの可能性は、ここでは不気味に反転させられている。人生をはかない夢にたとえる表現は、同じビーダーマイア一期を代表する劇作家グリルパルツァーの作品にも見られるが、グリルパルツァーは、ファウストの真の幸福が「自己抑制と心の平和」のなかにあると結論づけ、静観と諦念のなかにも、ある穏やかな幸福を際立たせている点において、レーナウとは対照的な世界観を示している。『韻文詩ファウスト』の結末は、自己破壊的で逃避的な性格をもつように思われるが、レーナウにとって生への懐疑とは決してネガティブなものではなく、自らを鼓舞し、前へと進む原動力をもたらしうるものでもあった。こうした姿勢のなかで、晩年の彼はヘーゲル哲学への関心を強め、人間と自然のあいだの弁証法的関係を模索する道をたどることになった。

第六章では、グラッベの悲劇『ドン・ファンとファウスト』（1829）を取り上げる。グラッベは、その文学において、新たな構築のための解体というコンセプトに意義を見出しており、この作品においても主人公ファウストに、「廢墟からの創造」を訴えさせている。こうした破壊的意志は、彼の演劇的野心や名誉欲の表れと解されることも多いが、その一方でグラッベは、道化的自己表現のうちに否定性とユーモアの結びつき、悲喜劇的な調子を盛り込むことを忘れてはいない。レーナウが究極の自己実現としての自己放棄へと到達し、生の苦しみからの解放としての死に慰めを見出したのに対して、グラッベは諧謔とユーモアをたくみに用いることによって、多視点的な客観性を獲得する。この作品でも、享楽主義者ドン・ファンの饒舌や喜劇役者的な振舞いは、対象への解剖学的な冷たさをもったファウストとのあいだに緊張感あふれるコントラストを生み出している。その一方で、ドンナ・アンナの愛をめぐる二人の争いが多くの犠牲を生むことにより、両者の征服者的本質に内在する残虐性が暴露され、誘惑者ドン・ファンとの対比によって、学者ファウストの認識衝動の罪深さもまた白日の下にさらされる。ここで、正反対の本質をもつ両者がともに心の拠り所とする唯一の概念が、「祖国」であることは興味深い。この作品における愛国主義的要素

は、ナチス時代に改めて利用されることになるが、こうした祖国愛描写がグラッペの真意を反映しているかどうかについては、疑問の余地がある。祖国愛の強調が、ドンナ・アンナの愛を得るための謀略のレトリックにすぎないことが、テキスト序盤ですでに明かされていることに鑑みれば、「王と名誉、祖国と愛」というスローガンが提示する欺瞞に満ちた英雄性は、今にも喜劇へと転じかねない危うさを露呈している。

レッシングが強調したファウストの天才的独創性や、プロメテウスを思わせる反逆精神は、好意的に受け止められたが、その一方で、独立性や異質さゆえにもたらされる孤独と無理解は、社会憎悪や自己否定といったネガティブなものへ転じる危険をも孕んでいた。また、悪魔との契約とそれにともなう数々の罪を英雄的に描き、結末を救済へと導こうとする試みは、構造自体に問題性を有しており、救済と恩寵への願望には、罪からの逃避の後ろめたさが付きまとっていた。ファウスト文学への取り組みは、生き生きとした体験と引き換えに犯さざるをえない罪に対する自己断罪の試みとしての性格をもっており、レッシング以降繰り返された救済と地獄墮ちの描写は、啓蒙され近代化された自我の肯定的・否定的側面を映し出すものとして、今なおそのアクチュアリティを失ってはいない。

(論文審査の結果の要旨)

人間の限界をこえる認識欲と活動欲をみたすために、悪魔と契約を結んだとされるファウスト博士をめぐる伝説は、16世紀のドイツで形成され、作者不詳の民衆本『実伝ヨーハン・ファウスト博士』(1587)として初めて公刊された。この素材は、18世紀以降のドイツ語圏の多くの作家たちに引きつがれ、ゲーテの『ファウスト』(1808/32)をはじめとする数多くの作品が生み出された。本論文の序論で論者は、ファウスト文学の歴史にかんする従来の研究では、ゲーテの作品が中心におかれる傾向が強く、その結果として、同時代の他の作家たちの作品が十分に評価されてこなかったことを指摘する。それに対して論者は、ゲーテに先立ってファウストの救済を初めて描こうとした啓蒙主義の劇作家レッシングの試みに着目する。本論文は、レッシングを起点とすることによって、これまで論じられることが少なかった作家や作品も含めて、18世紀後半から19世紀前半にかけてのドイツ語圏におけるファウスト文学を、新たに読みなおそうとする試みである。

本論文の第一の特色は、ファウストを救済しようとしたレッシングの試みが、時代の推移とともにしだいに主人公の断罪へと反転してゆく過程を、具体的な作品にそくして跡づけた点にある。論者は、人間の認識欲を肯定的に捉えなおそうとする啓蒙主義の精神が、レッシングのファウスト救済の構想を生み出すと同時に、まさしくその合理主義的思考のゆえに、悪魔や天使といった非現実的な要素をともなうファウスト劇が、完成されることなく断片にとどまらざるをえなかった経緯を明らかにする。だがそれにもかかわらず、後代の作家たちによってファウストの素材が相次いで取り上げられるようになった点に、論者はレッシングのファウスト構想の影響力の大きさを見て取るのである(第一章)。その実例として論者は、従来の研究ではなおざりにされてきたパウル・ヴァイトマンの『寓意劇ヨーハン・ファウスト』(1775)、フリードリヒ・ミュラーの『韻文劇ファウスト』(1778/1823)、レンツの断片『地獄の審判者』(1777)を取り上げる。ヴァイトマンとミュラーは、ともにレッシングの構想を受けついで、その作品の結末でファウストの救済を描き出した。だが、論者によると、この二つの作品では、世界を変革する力をもつことが、ファウストに不安をもたらす契機ともなっており、ここには、啓蒙主義それ自体に内在するアポリアが表れているという(第二章)。他方レンツは、レッシングの構想を受けつぎながらも、ファウストを自分自身と重ねあわせ、茶番劇の主人公として描き出すことによって、主観的自我と客観的世界の対立というテーマを、ファウスト文学の歴史のなかで先駆的に示した点が評価される(第三章)。

それに対して、クリンガーの小説『ファウストの生涯、行状、地獄行』(1791)の結末では、ファウストの地獄墮ちが描かれる。だが、論者はそこに、主人公に対する否定的評価ではなく、墮落した地上世界に対する作家の激しい批判を読み取ろうとする。こうしてこの作品は、啓蒙主義がはらんでいるペシミズムを体現するものとして、レッシングのオプティミズムに対置されるのである(第四章)。19世紀に書かれたファウスト文学のなかでは、レーナウの『韻文詩ファウスト』(1836)とグラッベの戯曲『ドン・ファンとファウスト』(1829)が論じられる。前者は、ファウストの自殺という結末によって、救済か地獄墮ちかという二分法的解釈をすり抜ける曖昧さを示しており、後者は、誘惑者ドン・ファンと認識者ファウストを対置することによって、ファウストの認識衝動がはらむ否定的側面を浮き彫りにする。論者は、この二つの作品を、主人公の神格化による英雄的悲劇の創出がもはや困難となった時代における、ファウスト神話の脱神話化の試みとして位置づけるのである(第五章、第六章)。

このようにして論者は、18世紀から19世紀へといたるファウスト文学の変容を、近代的自我の救済という啓蒙主義の理念がもともとはらんでいたアポリアが、しだ

いに顕在化してゆく過程として読みといてゆく。そして、そのなかにあつて主人公の救済を描ききったゲーテの『ファウスト』は、一つの例外的存在とみなされる。以上のように、独自の視点から近代ドイツにおけるファウスト文学の歴史を捉えなおした本論文は、ゲーテを中心にすえた従来のファウスト文学研究を補完するすぐれた研究成果として、高く評価することができる。

本論文のもう一つの特徴は、ファウスト文学の変容過程を跡づけるのみにはとどまらず、個々のファウスト作品を、それぞれの作家の創作活動全体のなかに位置づけた点である。論者は、レッシングのファウスト劇の構想が、『エミーリア・ガロッティ』(1772)、『賢者ナータン』(1779)、『人類の教育』(1780)などの後期の作品へと引きつがれてゆくと同時に、それがレッシング自身の自己救済への願望ともかかわっていたことを指摘する(第一章)。レンツのファウスト劇にかんしては、悲劇と喜劇の区分にかんするレッシングの理論を転倒させることによって、喜劇というジャンルに新たな意味を与えようとしたレンツの試みが、『家庭教師』(1774)や『ドイツのパンデモニウム』(1775)などの作品にそくして分析される(第三章)。また、クリンガーのファウスト小説は、1770年代にシュトゥルム・ウント・ドラングの劇作家として出発したこの作家が、1790年代に入って小説というジャンルへと移行してゆく過程のなかに位置づけられる(第四章)。こうした点はいずれも、それぞれの作家研究に新たな知見をもたらす貴重な研究成果である。

だがむろん、本論文にも欠点がないわけではない。論文のなかで使用される「救済」や「近代的自我」などの概念には、より明確な規定が必要であるように思われる。また、個々の作品の解釈にかんしては、さらにテキストの細部に立ち入った分析が望まれる箇所も見うけられる。ゲーテの『ファウスト』が正面から論じられていないことは、本論文の問題設定からして十分に理解できるとはいえ、論者が本論文の成果をふまえたうえで、ゲーテをも視野に入れた、さらにスケールの大きなファウスト文学史を完成させることが期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年2月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。